

まんてんプロジェクト発足のころ

～15周年に寄せて～

神奈川県異業種連携協議会
専務理事 芝 忠

2019年6月27日、横浜で「まんてんプロジェクト」設立15周年記念総会が開催され、当日は記念の名入りボールペンの配布やら、往時の懇親会場であった「弁慶」(現とりろう)には当時の経営者が招かれ、私のような古参の連中と久しぶりの出会いを楽しむ機会が設けられた。総会では8分ほど昔の話をしましたが、改めて、プロジェクト発足前後の話をまとめてみました。発足後の活動については現会長の瀧澤清さんや、愛恭輔専務理事に書いてもらいたいです。

2003年11月、旧NASDA(宇宙開発事業団)のH-IIAロケット6号機が種子島宇宙センターから打ち上げられたが、10分後に軌道から外れて、破壊されて太平洋の深海に墜落した。打ち上げプロジェクトの予算が1100億円とされています。このころ「国産ロケットはなぜ墜ちるのか」(松浦晋也、日経BP社)という本まで出版される始末で、原因追究が深刻だった。深海に墜落したエンジン本体は奇跡的に発見回収されて原因究明に貢献した。原因は補助エンジンを切り離す部品回路が熱のため断線し、作動しなかったと言われている。

当時、宇宙開発の製品の各種部品の国産化比率が30%にまで落ち、海外部品の生産履歴が不明瞭で、事故の時の原因調査が不完全だったため、国産化率を上げようとしていた矢先だった。

これに先立って、2002年5月、宇宙部品委員会の報告書を、当時神奈川県産業振興センター財団異業種交流センターのビジネスコーディネータだった千田泰弘氏が筆者に示し、これに関連した説明会が東京墨田の中小企業センターである、という情報もたらされた。一人で聴きに行くのは自信が無かったが、聴講して初めて事態が分かった。それは単に国産化部品探しだけでなく、いわゆる旧来の大手企業がなかなか開発出来ない新たな製品や部品づくりのアイデアを全国の中小企業やベンチャーに期待していることだった。それなら我々も参加できると考え、千田氏や他のビジネスコーディネータの瀧澤・愛両氏と相談し、神奈川・東京の中小企業者へ呼びかけた。反応は直ぐにきた。東京練馬区の青木精機製作所社長青木祐寿さんから「芝さん覚えている？ うち宇宙部品やっているんだ、東京だけど参加出来る？」。

もちろんOKで30社ばかり集まって、初代会長に青木さんが就任した。その後会員が増えて一時は120社、現在は80社である。

ものづくりの基地であった神奈川から年々「地方移転」や海外進出やらで「先細り」感のあった地域の再活性化をめざすには「ポスト自動車」産業として航空宇宙産業振興も必要だという認識で「航空宇宙開発関連部品調達支援プロジェクト」という長い名前のグループを設立した。このプロジェクト自体は大変反響があり、全国から問い合わせがあった。宇宙開発事業団(旧、NASDA)も積極的に支援してくれた。

さて実際に活動を展開すると「名前が長すぎる!」。何か良い名前はないかなと考えていたときに、NHKの朝ドラで屋久島出身の日高満天さんという若い女性が宇宙飛行士を目指すというのが放映されていた。「これだ!」と思ったけど、NHKに黙って使うわけにもいかず、と言って正式に相談しても許可がなかなかおこないだろうし、登録商標を調べると登録してないようだし、「えい使わせてもらおう」と略称「まんてんプロジェクト」とした。大変良い名前で、簡略で、親しみやすい。しかしいつNHKから勝手に使ってけしからんと抗議されるかと冷や冷やだった。その後NHKが宇宙開発を目指す全国の民間の事例紹介を行ったとき、「神奈川でまんてんプロジェクトがあり、NHKの朝ドラから取った名前です、使ってもらっ

てありがたい」という趣旨の解説があつて内心ほっとした。

その後、ある出版社から小学生向けの社会科教科書の副読本として「社会科資料集」に紹介したいという話があり、「特集、世界にはばたく日本の産業、メイドインジャパン、中小工場の技術、町工場から宇宙へ」の中で「国際宇宙ステーションでかつやく『まんてんプロジェクト』」として紹介された。オービタルエンジニアリングと山之内製作所とJAXAが掲載されています。小学5年生用で、オールカラー105頁で、かなり分厚いものだ。

2003年9月1日、「第1回宇宙開発利用産学官連携シンポジウム」(宇宙企業元年)が赤坂プリンスホテルで行われ、NASDA(宇宙開発事業団)からJAXA(宇宙航空研究開発機構)へ移行する記念行事があった。700名が参加した大規模なものであったが、その中で「宇宙開発利用を経済活性化に」というパネルディスカッションに筆者が呼ばれ、神奈川の事例紹介をしながら中小企業者のとりくみを報告した。パネリストには文部科学省や経済産業省の課長クラスも参加しており、一挙にまんてんプロジェクトは有名になった。当時、文部科学副大臣を旧通産省時代から懇意にしていた原田義昭氏がやっており、別途訪問したときには宇宙利用室長が「芝さんを知っていますよ」と言われた時には、当たり前かもしれないがびっくりした。

まんてんプロジェクトが脚光を浴びたのは。その設立が全国的にみて比較的早期だったことや、東京に近く、NASDA や JAXA との出入りもし易かった。NASDA の宇宙用部品技術コーディネータ杉尾晃正さんが度々来て、まんてんプロジェクト傘下の企業を訪問して歩いた。また我々のコンセプトも特定企業の利便を図るというより全国の中小企業者の仕事づくりだったので、‘官’としても支援しやすかった。

「平成 15 年度中小企業と連携した基盤技術研究体制の構築」として「0.1N 級スラスト能力試験装置の検討・開発」という発注依頼がきた。宇宙空間できわめて微小な力を加えて物体を動かす試験装置であった。当時、文科省の政策課長和田智明氏が神奈川県企画部に出向していた経歴もあったし、筆者が赤坂プリンスホテルシンポのパネリストだったというのも「上を説得しやすかった」と聞いている。本事業は実際には赤字だったが、JAXA からの本格受注の試金石となった。原田副大臣に会ったこともまんてんプロジェクトのステータスを上げた。

まんてんプロジェクトから、任意団体の弱さを克服するために、(株)JASPA を共同で設立し、盛大に発会式を行ったが、来賓の文科省の担当官が筆者に「考えれば 1 企業(JASPA)に

きたのはいかなものか」と笑っていた。確かに JASPA は 1 企業かも知れないが、共同で設立したので、純然たる 1 企業ではない。こういうところに異業種連携の強さが出ている。

その後、JASPA は、三次元測定機も装備して、かなりの受注や調査事業を行ったが、こうした形態の経営は難しく、実質的に縮小して山之内製作所に吸収された。もちろん法人格は残っており、対外的な補助事業の申請企業としての機能を果たしている。

以上のように、まんてんプロジェクト発足のころは、宇宙開発に重点を置いて活動していたが、その後宇宙ビジネスは、少量で、利益が少なく、正直言ってなかなか厳しく、航空にシフトしてきている。いわばまんてんプロジェクトの転換である。しかしプロジェクトとしては、15 年も続いているのだから存在価値は十分にあるということだ。関係者の努力に敬意を表したい。

芝 忠 (しば ただし)

1942 年生まれ、東京都立大学工学部卒業して、すぐ神奈川県庁に入り、旧工業試験所で研究及び技術支援業務に携わった。1976 年頃から異業種交流を手掛け、1984 年に神奈川県異業種グループ連絡会議(異グ連)を結成して以来事務局を継続して担当。現在イグレン専務理事。